

審査の結果の要旨

近代中国における人文学の発展に巨大な足跡を残した王国維（1877-1927）は、1902年に日本に留学して哲学を学び、ドイツ哲学をはじめて中国に紹介し、次いで文学研究に転進して劇文学史研究の分野で開拓者的成果を収め、さらに歴史学研究に転じ、新発見の殷代甲骨資料を用いて中国上古史研究で画期的業績を挙げるなど、曲折に富む学業の生涯を送った。喬志航「『近代』、『新学』と王国維 - 『哲学』と『史学』の王国維における位置づけ」（以下「本論文」という。）は、この王国維を研究対象に取り上げ、学術史と思想史の交差する地平で王国維の学問の意味を捉えようとした作品である。

本論文は2部からなる。第1部「王国維と『哲学』」では、1900年代に展開された哲学の領域における王国維の知的営為が分析される。「哲学」は明治期の日本で作られた翻訳語であり、伝統的教養を持つ中国知識人にとって決して自明の概念ではなかった。第1部の諸章では、日本留学して「哲学」に接した王国維が、いかなる動機と関心に基づいて西洋哲学（特にショーペンハウアー哲学）に接近したか、西洋哲学の諸概念を咀嚼した王国維がそれらの概念を用いつつどのようにして中国の伝統的学術・思想の体系を意味づけようとしたのか、そして王国維はなぜ哲学研究を放棄したのか等の諸問題が分析される。

第2部「『新史学』と王国維」では、中華民国期に展開された歴史学の領域における王国維の知的営為が分析される。20世紀の中国史学界では、「新史学」と総称される新潮流が主流となり、王国維も梁啓超、胡適、顧頡剛、郭沫若とともにその一員とみなされるが、著者は第2部の諸章において、梁啓超らの歴史学との比較を通じて王国維史学の特質の解明を試み、王国維のみが西洋中心主義的視座に対して批判的であったことを明らかにする。

本論文の主要な功績は、以下の2点に要約することができる。第1の功績は、哲学研究に没頭した初期の王国維を取り上げ、この時期の彼の思想と学術に本格的な分析のメスを加えたことである。従来の王国維研究は、文学研究ないし歴史学研究に従事した後期の王国維を専ら取り上げ、資料的制約もあって、初期王国維は研究上の空白となっていた。著者は、日本留学の成果を生かして初期王国維の分析を行い、初期王国維と後期王国維の間で何が連続し何が不連続であるかを明らかにした。

第2の功績は、王国維の歴史学研究に対して思想史的分析を加えたことである。王国維の中国上古史研究の大部分は緻密な実証的記述に費やされ、彼の著作数の膨大さも手伝って、これまでの王国維研究は、専らその中国史学史上の意義の説明にとどまっていた。著者は、王国維の方法を他の「新史学」の研究者の方法と、その思想枠組に遡って比較し、王国維の歴史学の思想史的意義を明らかにした。

もちろん、本論文に欠陥がないわけではない。哲学研究および歴史学研究と鼎立する王国維の文学研究について殆ど言及されていないこと、王国維の哲学的立場と20年代に登場する新儒家の哲学的立場との異同の吟味が十分でないこと等は、本論文の欠陥のうちでも特に顕著なものである。とはいえ、これらの欠陥は決して致命的なものではなく、本論文が単著として刊行されるまでには矯正可能なものである。膨大な王国維の著作に真摯に取り組み、前期王国維と後期王国維を一貫した問題意識のもとに捉え、王国維の学問の全体像の意味を明らかにした本論文の功績は、これらの欠陥を十分に補うものであり、本論文は、著者が自立して研究を行うのに十分な能力を有していることを立証していると判断される。よって、審査委員は一致して、本論文が博士（文学）を授与するのにふさわしい業績であると認めた。